

A部門 最優秀賞 作品 No. 47

ボルト君の活躍

西郷史隆

ボルト君は考えていた。ここはどこだっけ？今日はとりわけ寒い。回りは僕と同じ形をした友達だ。でも、ずっとこの姿勢のまま。人間達が言っていたなあ。ここはボルト保管の立体倉庫だって。僕は兄弟たちと何年ここに眠っているのだろう。

僕は黄色い顔色をしている。友達から聞いたところでは、弟達の肌は銀色。最新式の「三価クロメート・めっき」という肌に身を包んでいる。毎日、彼らは工場からトラックに乗って、知らない世界に旅立つ。とても嬉しそうだ。どうやら僕は「六価クロメート・めっき」という旧式の肌らしい。だから今や表舞台には立てないのだと。でも、いつも思うんだ。僕は本来このような倉庫にいるのが正しい姿では無いような気がする。なぜだろうか。

僕が生まれたのは、東北の田舎町。合金鋼という素材を切断され、思い切り頭を叩かれた。あまりに大きな力だったので僕の頭は六角形になってしまった。胴回りを挟まれてグルグル廻され、目が回ったと思った途端、胴回りにはたくさんの螺旋のクビレがついてしまった。人はこれを「ねじ」と言うらしい。更にとっても熱い炉の中に入れられたと思ったら水風呂に落とされた。このせいで、柔らかかった僕の体はすっかり強い筋肉質に変貌した。その後、めっきというプールで揉まれているうちに、黄色い皮膚をまとった。自分で言うのもなんだが、僕はかなりイケメンだと思う。でも、その肌が少しだけ時代遅れだったから、倉庫という場所に何年も眠らされているらしい。

声を大にして言いたいんだ。僕はこんなところでじっとしているために生まれたのではないって。

夏になった。倉庫の中はとても暑い。そんなある日、突然人間が僕の箱を手にした。「さあ、出番だ」彼は言った。突然テーブルの上に置かれ、友達と別れて一人ずつ小さい袋に入れられた。人間によると、僕らは「サービス部品」と呼ばれ、弟達のように自動車工場に行かず、一個ずつ「整備工場」というところに連れて行かれるらしい。小さなビニール袋は窮屈だったが、もうすぐ自分が役に立てるのではないかと思うと、胸がときめいてきた。

着いたのは大阪の整備工場。いろんな声と騒音が飛び交っている。一番大きな声はラジオという箱から流れているDJの声だ。関西弁というらしい。今まで聞いた人間の話し方とかなり違う。どうやら今晚の阪神タイガースの試合を予想しているようだ。僕の前には交通事故を起こしたのか、前がぺちゃんこになった車がある。そして、整備士のバッ

チをつけた年配の親父と青年がいる。

二人はなにやら相談を繰り返しながらも、手際よく車を修理していく。僕の横には新品のサスペンションリンクという部品がいる。カチオン電着塗装というキラキラ光るリンク君は、とても凛々しく見える。彼は横浜で生まれて、僕と同じように倉庫で数ヶ月出番を待っていたらしい。彼はいう。「ほら、僕のここの懐のところに、君が入って行くのだよ」と。でも、まだ僕は、どのように僕がその懐を通過するのか、理解に苦しんでいた。

作業は夜になってもまだ続いていた。整備工場の二人は親子ということが分かった。だから息が合うのだろう、手際よく修理が進むが、この車のダメージはかなりのものらしく、すっかり遅い時間になっている。なんでもこの車のオーナーは会社の重役、考え事をしながら交差点に進入したら、横方向から来た車と衝突し、大破したらしい。普通だったら廃車になるところを、どうしても思い入れのある車だから修理をしたいと要請してきたそうだ。

夜もふけて事故車から大きく変形したサスペンションリンクと、「くの字」に曲がったボルトが外された。おお、この古ボルトは僕の旧友ではないか。「お、久しぶり」僕の声で彼は気がつき、か細い声で言った。「あ、ああ、おまえかあ。久しぶりだな。僕はこんな形に曲がってしまったから外されて、鉄屑になるんだ。僕の代役は君だ。これから誇りと楽しさに満ちた世界が君を待ってるぜ。」

その後に起きたことは僕にとっては大きなターニングポイントだった。そして、このようなことは初体験だった。僕は新品のサスペンションリンク君の「懐の穴」の中をくぐった。すると、僕の先端のねじ部にほかの部品がかみこむのを感じた。その部品は「ナット」と呼ばれる部品だ。故障した車についていた物で、僕と違って穴の中にねじがついている。この部品は女性だったので、「ナット姫」と呼ぼう。「初めまして、よろしくお願ひします」と僕は言った。彼女は年上。「ちょっと私は汚れているけど、しっかりあなたと噛みこむから」と、彼女。「そう、私たちは一緒にないと役に立てないのよ」「え？一緒にないと役に立てない？」「そう、合体する運命なの」「運命？」などと二、三会話をしていたら、直後にその意味が分かった。

整備工場の息子はインパクトレンチという道具を出してきて、僕の六角の頭を思いっきりグルグル廻し始めたではないか。ナット姫もそれにつられて一緒にグルグル廻り始めた。「チッ！供回りするか。メガネでナットを止めなきゃ」。メガネという道具でナット姫が固定されると、僕の「ねじ」が彼女のねじとしっかりと噛みこんだ。レンチが回転するに従い、ますますナット姫は更にしっかりと噛み込んでくる。僕の胴回りはどんどん伸ばされて行く。たまた首の上にある僕のフランジ部はサスペンションリンク君を押しつけていく。同様にナット姫のフランジ部もリンク君の反対側を強烈に押しつけている。僕の筋肉質の胴回りは更にどんどん伸ばされる。でも、僕はとてもとても強い高強度ボルトという素質をもっているからまだ大丈夫だ。限界には少し余裕がある。きっと街で売

られている普通のボルトだと、そうもいかないだろう。 そうだ。僕はそこらへんの奴とは限界体力が違うのさ。

「えーっと、トルクレンチはどこだっけ？親父」息子がいう。 僕の背中はかなり伸ばされているが、さらに彼はぼくをナット姫に深く食い込ませようとしている。 結局僕は更に二回廻された。体中の筋肉が大変な力で伸ばされる。 反対に、サスペンションリンク君を僕はありったけの力で押しえつけている。合体したナット姫も必死だ。彼女の持つ最大の力で僕のねじに食い込み、共同で力を発揮させている。

そうだ。これが僕の本来ある姿だ。 今まで倉庫に寝ていた期間は何だったのだろう。この姿こそ、世間の役に立つ姿だ。 僕は実感した。 整備工場の息子はトルクレンチを外し、ジャッキアップされた車はゆっくりと地面に降ろされた。もう夜の十時を過ぎていた。 親子は電気を消し、「風呂入って寝つか。明日は引渡しや。」 と言って電気を消した。

親子が去ってからも、暗い中で僕は興奮していた。 僕は修理された自動車に組み込まれたのだ。 どうやら僕に課せられた使命は、このサスペンションリンク君をいつまでもしっかりと押しえつけ続けることらしい。 どんな悪路でもどんな高速でも、僕は彼をしっかりと止めておかなければならない。 僕の体は小さいながらも何トンもの大きな力が出せるのだ。 この使命をしっかりと受け止めて働き続けなければならない。がんばるぞ。死ぬまでがんばるぞ。

その後、無事に元事故車はオーナーの元に戻され、僕は自動車とともにいろんな場所に行くことになった。 オーナーは週末にアウトドアに行くことが好きなようで、僕は北に南に、東に西にと出かけることができた。そして僕はどんな時にもしっかりと保持力を出し続けることが使命だと知っていた。全てが溶けそうな灼熱の日も、凍てつく寒さの中、ツララが下がろうとも、僕はナット姫とがっちり手を組み、サスペンション君を支え続けた。 それより、いろいろな土地に行けること、活躍できていることがなによりうれしかった。

数ヶ月たったある日、車は再び整備工場に入った。 今度は以前の親子で営む整備工場ではなく、メーカーのディーラーに付属した整備工場だ。 はるかに大きく、きれいな工場だ。 車がジャッキアップされると僕の近くについている別のボルトが外された。 気づかなかっただけけれど、彼らは日本製ではなく、東南アジア生まれだったらしい。 整備士の人たちの声が聞こえてきた。 「リコール・キャンペーンだったって、俺たち現場はボルトを着脱するだけで大変だよなあ。メーカーはアジア製のボルトなんか使うからいけないんだ。」 「俺はよく分からないけど、なんでも「遅れ破壊の懸念」だっけさ。 出荷時は高品質のボルトに見えても数年したらボルトが突然吹っ飛ぶそうさ。危なっかしいなあ。」 「やっぱボルトは品質の高い日本製が良いよな」 そうか。 彼らアジア生まれのボルトは熱処理をミスしたのだろうか。結局日本製に替えられてしまった。 日本で生ま



れた僕は自分を誇りと思う。

そして今日も彼はしっかり働き続けた。日本品質の誇りと、自分の力がユーザーに安全を提供できる喜びをもって。